

## ■ 二見利節 《傘屋》

### 画狂人の系譜

湘南とくに平塚ゆかりの画家を顕彰発掘することを主眼としている私にとって、二見利節の作品はなくてはならない。その中でも二見の第一黄金期である昭和一〇年代の作品に巡り遭うことはたやすくないのである。そんな折、高木美術の故高木健雄氏から二見の人物画を入手したとの連絡があり、駆け付けてみると、そこにはあの「傘屋」があったのだ。この作品は昭和一二年の春陽会に出品された《作業S》通称「傘屋」のバリエーションであり、資料としては残っているものの図録もなく関係者の間では幻の作品であった。当時、帰朝した青山義雄はこの作品を見て、なぜ賞がつかないのか不思議に思ったとの感想を残しており、また当時の二見のことを木村莊八は「若くして自得の風を持つということは作家の資質にかけて識者に迎えられる条件の一つ」と評し、坂本繁二郎は「色彩のスケールが豊かで表面より寧ろ底力がある。色彩も単なる色彩のためでなく実相追求になっている。それで良く見て居る方がだんだん良くなって来る」と評し、「明日の画壇の為に二見氏が必要不可欠である」とまで絶賛している。原田実氏（初代平塚市美術館長）は二見の回顧展図録の終りにこう書いている。「実相追求の画家、二見利節は絵を描くことへの執念においては旧友長谷川利行と同じように、立派に画狂人・葛飾北斎の系譜につらなる存在であったといえるでしょう」と。

平園賢一（神奈川県平塚市）

### 二見利節 《傘屋》

油彩・キャンパス 53.0 × 45.5cm 1938年



二見利節（ふたみ・としとき／1911-1976年）  
神奈川生れの洋画家。井上三綱に師事。1933年春陽会、東光会に初入選。38年春陽会賞。38、39年と文展連続特選。41年新文展無鑑査。48年国画会会員。69年渡欧。紺綬褒章。76年没。65歳。湘南二宮町にふたみ記念館開館。

# ■ 本荘 赴 《山羊小屋》

## 洋画界の渡辺崋山

平成一一年春、梅野記念絵画館の梅野隆初代館長にこの作品入手を手紙で報告したところ、その返事には「本荘赴の名品思わずあつと声を立ててしまいました。私が今まで見た本荘作品の中で最も優れたものです…。心の震えのおもむくままにしたためました」。私以上に梅野館長も驚かれた御様子でした。本荘を知る者にとってこれ以上の驚きはそうざらにはない出来事でした。

本荘は地元の小学校の教師をしながら絵を描き、春陽会会員になったのち五〇歳で専業画家になったものの画商嫌いのため、その名はほとんど世に知られることなく、皮肉にもそのお陰で精神性の高い、画格無双の作品群を残せたわけです。本荘は井上三綱から図ではなく絵を教わり、石井鶴三から物の裏側を描く事を教わり、安田靉彦画伯の夢でもあった日本画を油彩で描くという難事を具現化したのであります。本荘作品の魅力は静隠な画面にひそむ深い観照性にあることは誰もが認めることでしょう。しかしその裏側には「画道はこれ丈夫の道」という命懸けの覚悟があることを忘れてはならないでしょう。いわゆるアーチストの氾濫する時代に、古武士のような一徹で硬骨な本荘のような画家はもう現れないかもしれません。洋画会の渡辺崋山がこの平塚から出たことは平塚市民として誇りに思っています。最後に、日本人が描く油彩画を高いレベルでひとつの形として完成させた功績は、洋画史上もっと評価されていいと思っています。

平園賢一（神奈川県平塚市）

本荘 赴 《山羊小屋》

油彩・キャンバス 60.6 × 90.9cm 制作年不詳



本荘 赴(ほんじょう・たけし/1906-1993年)  
平塚市生れの洋画家。井上三綱、安田靉彦に師事。1935年春陽会初入選。40年春陽会賞、53年会員。西湘平塚地域の美術運動の中心者として活躍。古武士のような高邁な人格と静穏なる画風で知られる。93年没。87歳。

## ■ 松山忠三 《テムズ川河口》

英国に帰化し、一度も祖国の土を踏むことなく没した画家

停泊中(?)の船が印象的な古い水彩画である。近づいてみると右下には画家のサインがあり、一九二七年、さらに丸の中に「忠三」と書いてあるようだ。しかしながら忠の文字は独特の形をしており、忠三と読むには少し不安が残った。当初、絵の雰囲気からみて私には外国人の画家の作品と思えた。しかし、漢字のサインがあることから、作者は日本人であるとの確信に変わった。しかも、絵の描かれた場所は外国と思われ、少なくとも画家は昭和二年に欧州等に滞在中の人物であると考え、調査をしてみることにした。

調査を開始して間もなく、明治四一年から明治四五年まで太平洋画会展に出品していた松山忠三に辿り着いた。さらに調査を進めると作家解説の中に「大正三年ロンドンで結婚し、ロイヤル・アカデミーを中心に出品を続け、イギリスで活躍を続けた。」とあるではないか、思わず心の中で万歳を叫んだ。その後、青森県立郷土館の對馬恵美子氏(学芸主査)に照会し、松山忠三の作品であることが確認できた。

この絵について、私は密かに忠三作品の代表作に推したいと考えている。理由は小品が多い中であって数少ない大型サイズであること。次に忠三は彼の地にあっても、日本人の心の内にある余白の美を忘れていなかった。構図は画面に大胆な余白をもたせ、右上部の甲板上の人物は、見る者に自由な発想を与え、画面を引き締める役割を持たせるなど完成度が高いことが主な理由である。

佐々木征(千葉県船橋市)

松山忠三 《テムズ川河口》  
水彩・紙 33.3 × 50.0cm 1927年



松山忠三(まつやま・ちゅうぞう/1880-1954年)  
青森県生れ。水彩画講習所に学ぶ。太平洋画会展4回出品。『みづゑ』に作品掲載。1911年渡英。ロイヤル・アカデミーを中心に出品を続け、英国で活躍。英国の美術雑誌に作品掲載。英国籍取得。英国で没。73歳。



# 油井夫山 《洗物する少女》

## 「亜欧堂田善」研究の第一人者の風景画

四号ほどの板に描かれた作者不詳の風景画である。一瞬、黒田清輝の作品と見紛うばかりの外光派的作風に思えたが、一方で黒田の作品が簡単に入手出来るはずはないとその思いを打ち消した。作品には昭和四年、○山、忠(?)と書いてあり、黒田は大正一三年に亡くなっており対象外である。問題は「○山」のくずし字が解読できないことである。私は止む無くこれとは思えるくずし文字の解読に取り掛かった結果、遂に「夫」に辿り着いた。解読不可能と思えた画家の名前は「夫山」と判明した。その後の作業は自身驚くほどにとんとん拍子に進んだ。以前に読んだ『福島近代美術』の中に「油井夫山」について取上げられていたことを思い出したのである。

ところで念願の作者特定作業は、三好寛佳氏(三好企画)、村山鎮雄氏(著者)、油井昭夫氏(「遺族」の協力をいただき完結することができた。さらに油井昭夫氏から提供された資料によると、夫山は「福島県美術界の礎を築いた人物」と評価されており、一方で「亜欧堂田善」「熊坂適山」の研究者としても名を成している事実も判明した。

私はこの絵を見て、岸辺で洗濯をしているのであろう村娘と波紋の描写が気に入り購入を決めた経緯がある。また、調査段階で福島県立美術館学芸課の宮武弘氏に照会のところ、晩年の風景画作品は散逸して不明との回答を得ており、夫山研究の面からも資料的価値が大きく大事にしたい作品と考えている。

佐々木征(千葉県船橋市)

油井夫山 《洗物する少女》  
油彩・板 33.0 × 24.0cm 1929年



油井夫山(本名:忠助)(ゆいふざん/1884-1934年)  
福島市生れ。東京美術学校西洋画科卒。奥羽六県連合共進会美術展の幹事。亜欧堂研究に着手。白馬会展入選。福島県でアートクラブ結成。光風会展入選。1923年福島洋画会結成。30年宮城県角田中学校教諭。34年没。51歳。

## ■ 児島善三郎 《鏡を持つ女》

### ピンとした緊張感

これは、日動画廊の和田さんから購入した作品です。

その後、鑑定に出した時に、大作（代々木時代…一九三〇年 タイトル《鏡》 九七×一三〇・五センチ）があり、私の購入品はその下絵である事が、解りました。

緊張感のあるこの絵はむしろ大作よりも私には良く思えるのです。

中村儀介（千葉県木更津市）

児島善三郎 《鏡を持つ女》  
油彩・キャンバス 30.0 × 40.0cm 1930年



児島善三郎（こじま・ぜんざぶろう／1893-1962年）  
福岡市生れ。本郷洋画研究所に通う。1922年二科賞。24～28年渡仏。28年二科展に滞欧作特陳、会友となる。30年独立美術協会の創立に参加。59年銀座松屋で自選展開催。現代日本美術展、日本国際美術展に出品。62年没。69歳。

## ■ 宇都宮周策 《ふるさと内子》

### 自然を愛した父

父が描いたこの絵は私が幼少時代過ごした松山市道後の家の鴨居に掛けられていて、朝晩に眺めて生活しました。

大好きなこの絵の作者を知らないまま小学校高学年になって、父が描いたと聞いた時は驚きました。父が生まれ私も生まれた愛媛県の内子の土蔵の風景は、穏やかな陽射しが屋根にさええざられて三角形の影を落とし、その下でお婆ちゃんとおさな児が話している日だまりの暖かさに心和む絵です。

父の自然に対する想いがあふれているように感じます。

櫛川公子はせがわ（東京都多摩市）

宇都宮周策 《ふるさと内子》  
油彩・板 23.6 × 33.0cm 1934年



宇都宮周策（うつのみや・しゅうさく／1907-1988年）  
愛媛県内子生れ。1930年頃から油絵を描き始める。39年東京帝国大学法学部卒。56年愛媛県松山市民病院を設立、後に真光園（病院）設立に携わる。67年四国遍路参りを完拝する。俳画を描き始める。88年没。81歳。



# 林 倭衛 《プロヴァンスの森》

## セザンヌに憧れつつ西欧を消化した画家

林倭衛は二科展で出品撤回命令が出た《出獄の日の大杉栄像》で有名かと思いますが、私には桐生の大川美術館の《除虫菊畑》が強く印象に残っています。これは滞欧作で、小品ながら健康的な光に溢れ、見る者の心を伸びやかにする気持ちのよい絵だと思いました。その後資料を探して調べてみると、親炙<sup>しんしやく</sup>していた大杉栄を介して、私の地元金沢に縁がある鴨居悠（私がこのように絵の無間地獄に墜ちる契機となった画家、鴨居玲の父親で、新聞記者として渡欧した際に倭衛と知り合った）と交友があり、晩年には金沢やその近郊に滞在し作品を残していたことも判り一層親近感<sup>いっだ</sup>を懐くようになりました。

この絵は一度目の渡欧時に南仏プロヴァンスのセザンヌがいたアトリエを借りていた時に描かれたものと思われます。木々や下草は密生していて緑が濃く、大きな岩も点在しており、あの有名なサントロヴィクトワール山へ通ずる道なのではとも想像しそうです。光溢れる明晰な風景ではなく、逆に射し込む光は少ないのですがその光を的確に捉えていて、様式だけの表面的な西洋の影響を避けているようにみえます。帰国後日本人として独自のリアリズムを目指す意識が既に感じられます。残念ながら終戦前の空襲でかなりの作品を焼失してしまい残された作品は多くなく、一般には忘れられた画家と言われるかと思いますが、今後もっと人々の記憶に残る価値がある画家だと思っています。

谷吉雄（石川県白山市）

林 倭衛 《プロヴァンスの森》  
油彩・キャンバス 60.0 × 72.8cm 1924年頃



林 倭衛（はやし・しづえ／1895-1945年）  
長野県生れ。日本水彩画研究所に学ぶ。1917年二科展で樗牛賞。18年二科賞。20年二科会会友。21～26年渡欧。26年春陽会会員。30年有島生馬の知遇を得る。36年国画会に出品。37年新文展審査員。45年没。49歳。

## ■ 佐分 眞 《セーヌの初秋》

### 若き画家の滞欧作に心惹かれて

前田寛治や佐伯祐三と同時代に、相前後して東京美術学校に学び、パリに留学した佐分眞でしたが、独自の画風を確立しえなかったのか、あるいは作品をほとんど売らなかったせいか、世間的には〈埋もれた画家〉に属すると思います。この絵との出会いは、まだ私が近代日本洋画の世界を知りその魅力にとり憑かれて間もない頃で、地元の画廊主から佐分の名を告げられても全く知りませんでした。しかしこの絵との出会いで、昭和のはじめに渡欧した若い画家が幾許かの気負いと純粹な昂揚する思いで描きあげた作品に、何の知識もなく裸眼で接し感動できた自分を嬉しく思い、これ以降このジャンル（若い頃の滞欧作）の作品に気持ち惹かれてゆきました。小品ながら見ごたえのある佐分の婦人像が桐生の大川美術館にあることも教えられ、憑き物がついたように出掛けました。そしてこの大川コレクションとの出会いが、今に到る絵画蒐集という無間地獄へ墮ちる人生に拍車を懸けることになったのです。これまで実際に見た佐分の作品は多くありませんが、画集や遺稿を見る限りなぜ自死したのか推し量ることができません。特に滞欧作はどれも自信に満ちており、伸びやかなタッチでマチエールも重厚でしかも色の取り合わせは洒落ており、内面的にも充実しているという印象を受けます。とても鬱屈した精神状態など微塵も感じられません。結局人がそれぞれ心の奥底に秘める闇の深さに嘆息しながらあらためてこの絵に見入ってしまいます。

谷吉雄（石川県白山市）

佐分 眞 《セーヌの初秋》

油彩・キャンバス 45.0 × 52.8cm 1926 ~ 30 年頃



佐分 眞（さぶり・まこと / 1898-1936年）  
名古屋市生れ。川端画学校に学ぶ。東京美術学校西洋画科卒。1925年白日会展で白日賞、後に会員となる。26年光風会賞、会員。27~30年渡仏。リアリズムに立脚した堅実な画風。31、33、34年帝展で特選。自死。37歳。



## ■ 今西中通 《フサ像》

### 中通のフォーブ作品を求めて

近代日本洋画の愛好家とりわけ市民コレクターを目指す人達にとって、偉大な先達の一人に梅野隆氏がおられます。氏の著書『美の狩人』に導かれ、その後直接お会いしその馨咳けがせに触れ多くを教えていただきました。特に作品とその作家に対する熱い想いを語られる時には、まさに口角泡を飛ばす勢いでいつも圧倒されていました。この梅野氏との出会いで最初に心惹かれた画家が今西中通でした。しかし地方に住む身ではたまに素描や水彩の小品を求めて身近に接し、中通の熱い魂の一端に触れた気分になり満足していました。画集や図録をみているとやはり油彩画、就中初期なつかしくのフォーブと称される作品（もちろん中通の作品ではキューブの時代の作品が大作も多く高く評価されていると思います）と巡り会いたいと思いを募らせていました。随分経ち半ば諦めかけていた頃、某オークションにこの絵が出品されることを知り、後先も考えず電話入札を申し込んでいました。初めての経験で舞い上がってしまい気が付けば目標の一・五倍の価格で落札してしまいました。モデルのフサ嬢の顔はかなりデフォルメされていますが、当時の日本女性の容貌としてはエキゾチックで情熱的な印象を受けます。中通は何点も彼女を描いています。どの作品にも想いが籠っており魅力的に出来上がっています。特に目と口に表れている意志の強さは、何か心に深く秘めている想いがあるのではと、見るものに思わせ惹きつけるように思います。

谷吉雄（石川県白山市）

今西中通 《フサ像》

油彩・板 23.0 × 16.0cm 1930年頃



今西中通（いまにしちゅうつう／1908-1947年）  
高知県生れ。1927年上京。川端画学校、「1930年協会研究所」、独立美術協会研究所に所属。前田寛治、里見勝蔵に学ぶ。35年独立展でD氏賞。福岡で絵画研究所を設立する。47年独立美術協会会員。福岡で没。38歳。

## ■ 柳瀬正夢 《風のある海景》

### 理想の追求と苦悩の末の平穏な風景画

柳瀬正夢の作品は、遺族をはじめとした身内の方や当時の後援者が所蔵されている以外、資料も含めその多くが武蔵野美術大学美術資料館に保管されており、世間に出回ることほとんどないようです。私も生誕一〇〇年の展覧会は見えておらず、実見したのは洲之内コレクションの《夕暮れ》だけです。しかし洲之内徹のエッセイには、郷里を同じくする先輩として哀惜の情に満ちた文章で、印象深く取り上げられています。それに加えて一四歳で上京した直後より村山槐多と深い親交があったことも強く脳裏に焼き着けられた理由だと思えます。前述の展覧会図録を通覧すると、初期にはセザンヌやゴッホ、ムンクの他、萬鉄五郎などの影響が色濃く感じられますが、早熟の天才と言わしめるに足る色彩の独特なバランスや構図の確かさは、驚嘆に値するものでしょう。ところでこの絵は、後年無産者階級の組織活動で検挙され、しかもその間に妻を病気で亡くすという苦悩の時代の後に全国を旅し、韜晦とうかいとも思える穏やかな風景画を描いていた時期のもので、南房総の鵜原海岸と思われるのですが、この絵に対峙すると、通奏低音として人が普遍的に持っている無明の闇の深さと、状況によっては容易にその人間性を失うという狂気を視てきた者が懐いだいたであろう諦念を考えてしまいます。切り立つ崖壁と荒く打ち寄せる波を描いていますが浅薄なニヒリズムは微塵もなく、不思議とそんなに暗くない静けさを感じます。

谷 吉雄（石川県白山市）

柳瀬正夢 《風のある海景》  
油彩・キャンパス 45.3 × 38.2cm 1936年



柳瀬正夢（やなせ・まさむ／1900-1945年）  
松山市生れ。1914年上京。日本水彩画会研究所に学ぶ。村山槐多から影響を受ける。未来派、キュビズム、構成主義に興味を抱き、未来派美術協会に入会。23年MAVOの結成に参加。ゲオルグ・グロスを研究。45年没。45歳。

## ■ 松本竣介 《少女》

### 竣介に憧れ続けたの思い入れ

洲之内徹氏の『気まぐれ美術館』シリーズを愛読するようになってから、松本竣介が憧れの対象として、私の心のどこか奥まった所に棲みつくようになりました。さらにその思いに油を注いだのが大川美術館での竣介の作品との出会いでした。このコレクションは大川氏が「絵は心のマッサージュ」との信条を具現化するため、人間画家の系譜を独自の審美眼と情熱で蒐集されたものですが、初めてこのコレクションの全容に接した時の驚きと感動は衝撃的で、今でも心が打ち震えたことを鮮明に覚えています。なかでも氏がコレクションの中核とされていた竣介の作品群に對峙した時は、代表作の《街》や《運河（汐留近く）》はもちろんのこと、小品のデッサンまでもがみな静かで硬質の叙情を湛え、しかも《どこまでも人間を信ずる》という竣介の確固としたヒューマニティーを感じさせられました。

この絵は戦後に描かれたものです。二科会へデビューした頃の硬質で透明感のある絵肌ではありませんが、若い頃の禎子夫人とも重なり合うような雰囲気を持つ少女（女性）の横顔がのびやかな線で描かれています。ことによると竣介にとっての永遠の女性にも繋がるのではなどと勝手に思い入れが強い、夢想を愉しみながら竣介に想いを馳せています。

谷吉雄（石川県白山市）

松本竣介 《少女》

油彩・キャンパス 22.8 × 16.1cm 1946年



松本竣介(まつもと・しゅんすけ/1912-1948年)  
東京生れ。昭和期の洋画家。太平洋画会研究所で学ぶ。麻生三郎、寺田政明と交友。1935年二科展初入選、40年に特待となる。九室会会員。43年靉光、麻生三郎らと新人画会を結成。47年自由美術家協会に出品。48年没。36歳。



## 長谷川利行 《少年像》

### 利行の情念にとり憑かれて

いつの頃からか、長谷川利行の作品を図録の中に見つかったり、その名前を聞いただけで心が波立つようになりました。まるで思春期の恋愛感情のようで、利行の作品なら何でも欲しいと思う熱病に罹患したわけです。

利行の絵には、対象が風景であろうが女性や花であろうが、必ず自分の心の襞の奥に潜んでいる琴線に触れてくる不思議な力があると感じ、遂には利行の情念に魂まで奪われてしまったようです。その最初に出会った作品は、まだ絵にのめり込みはじめて間もない頃、地元の画廊で突然目の前に現れた《裸婦》でした。小品でしたがまさに生命が弾けているとの感動に我ながら驚いてしまったものでした。或る日、某オークションの図録をチェックしていると聡明で意志の強そうな少年の顔が目に入り込んできました。利行の絵の大きな魅力は、少し頼りなげで余分な力が抜けた、しかし気持ちよいリズムカルな線で美しいフォルムを捉えており、さらに空気まで感得させるところにあると思います。しかしこの少年像はそのような表現を前面に出している絵ではなく、逆に愚直に対象の内面を正面から捉えようとした作品だと思っています。少年の意志的な表情、特に眼が発する力に魅力を感じました。少年ながら己の人生はすべて自分で引き受けるのだという強い意志を視てしまいます。

谷吉雄（石川県白山市）

長谷川利行 《少年像》

油彩・キャンパス 45.5 × 38.1cm 制作年不詳



長谷川利行（はせがわ・としゆき／1891-1940年）

京都生まれ。1919年私家版歌集『長谷川木華集』刊行。21年上京、矢野文夫と出会う。23年個人雑誌『火岸』第一輯「大火の岸に距りて歌へる」を自費出版。26年第2回1930年協会展入選（前田寛治、佐伯祐三、東郷青児、古賀春江、三岸好太郎らの評を得る）、第13回二科展入選。27年第3回1930年協会展奨励賞、第14回二科展樽牛賞、里見勝蔵、巖光、麻生三郎、井上長三郎等と交友。40年10月12日東京市養育院板橋本院にて胃癌により死去。69年上野不忍池弁天島に木村東介氏により「利行碑」建立、発起人に梅原龍三郎、揮毫は熊谷守一・有島生馬。

# 長谷川利行《大和屋かほる》／《安来節の女》

## 《大和家かほる》と《安来節の女》

大正六年ごろから太平洋戦争まで東京浅草に安来節ブームがまきおこった。明治三五年一二月一〇日、島根県出雲市村玉津津に五人兄弟の次女として生れた来間おめの（大和家八千代）。一四歳になると料亭の仲居として働きにでるが、「おしな」という安来節の歌い手から手ほどきを受け、出雲大社の大通りにあった置屋の大和家に入る。一六歳の時、姉春子一九歳、妹清子一二歳とともに、置屋の屋号大和家から大和三姉妹一座を設立した。その後、大阪で吉本興業の創業者吉本せいのもと巡業中、蝶印レコードで安来節を吹き込んだという。この時、浅草常盤座の根岸吉之助から声がかかり東京へ進出した。そして空前の浅草安来節の全盛時代を築いたという。その大和家三姉妹の一人が大和家かほるではなからうか。関東大震災や大恐慌等の曲折を経るが、そのブームは昭和二〇年の戦時中までつづいたという。だがその間に得た膨大な利益は興行師のものとなった。昭和初期の様々な社会的矛盾を抱えた貧しい人々、特に女性たちであったが、その魂を一瞬のうちにとらえた利行の画面には、昭和初期の現実が言葉を超えた「かたち」となって、つくりあげられた。

大和家三姉妹のうちの「駒千代」が「安来節の女」であると天城俊彦が言ったという。しかし、私見では東京漫才の始祖といわれる「東喜代駒・駒千代」ではなかったか。

東喜代駒（武井喜代次 一八九九年—一九七七年）は、「隆の連」の三姉妹（百龍・千龍・万龍）の一人を駒千代と名乗らせ、燕尾服を身にまとい、鼓を持つという新しい演芸スタイルを確立させたという。そのころ安来節小屋は漫才、曲芸などを加味し、スピード感あふれるバラエティショーと化し、大衆の人気が集まった。明治から大正、昭和期へと移行する時代の大きなうねりに彷徨し

ながら、貧しくも芸で身を立てた人々が持つ独特の色気やそこに潜むウエット感に利行の精神は昇華され、真骨頂が発揮された。

この絵を「安来節の女」と命名したのは、羽黒洞、木村東介ではなかったろうか。昭和二八年ごろ病氣療養中で面識のなかった中村正義がこの絵を贈った。そしてこの一枚の絵が兩人の後の因縁となったのだが、中村正義は「この作品は長く私の座右にあって私によく話しかけた。絵をかくことを〈商売〉としてきた私に、『絵かき屋さん』いつもこんなふうに話しかけるのだった。そして時には私を恥ずかしめ、また時には私を嘲笑しているかのように見えることもあった。日展をやめるようにすすめてくれた恩人も長谷川さんだったかもしれない」と書いている。中村正義が所有してから六〇年になろうかというこの絵を、ご高齢になられた夫人の中村あやさんが娘の倫子さんと私のもとへ観に来られた。

また、戦時中に利行の作品群を郷里である山形県に疎開させ、のちに長谷川利行の名を世に知らしめた羽黒洞木村東介の娘であり、現社長の木村品子さんが来られ、利行の作品群を大八車に乗せて疎開させた思い出話に涙ぐんだ。その娘の泰子さんも別の日に一人で来られた。この作品に関わった人々の優しい眼差しは、時空を超えた現実のものとなって、私に大きな感動を与えてくれたのだ。

一枚の絵画から受ける素朴な感動は、その検証によって、歴史観、価値観、場合によっては人生観までも自己の考察に及ぶものであり、コレクターの本望でもある。

長谷川利行は盟友である矢野文夫が訳したニーチェの言葉を引用して語った。「長い間蓄積され根気良く併置され強欲にも蓄藏された諸知識は信用ができぬ、それは用心深さ適応性不変性遅滞等の悪い兆候を持っている」。文人である利行が言語では現せないものの表現に「宵越しの知識は持たず」としたのだ。ひとたび筆を持ったときの利行には、煩惱を超越した一瞬のちからが宿ったのである。

星裕典（東京都中野区）



長谷川利行 《安来節の女》

油彩・キャンバス 34.0 × 46.0cm 1935年



長谷川利行 《大和家かほる》

油彩・キャンバス 41.0 × 32.0cm 1935年



長谷川利行 (はせがわ・としゆき / 1891-1940年)

京都生まれ。1919年私家版歌集『長谷川木葦集』刊行。21年上京、矢野文夫と出会う。23年個人雑誌『火岸』第一輯「大火の岸に距りて歌へる」を自費出版。26年第2回1930年協会展入選(前田寛治、佐伯祐三、東郷青児、古賀春江、三岸好太郎らの評を得る)、第13回二科展入選。27年第3回1930年協会展奨励賞、第14回二科展樗牛賞、里見勝蔵、巖光、麻生三郎、井上長三郎等と交友。40年10月12日東京市養育院板橋本院にて胃癌により死去。69年上野不忍池弁天島に木村東介氏により「利行碑」建立、発起人に梅原龍三郎、揮毫は熊谷守一・有島生馬。



## ■ 国吉康雄 《裸婦》

### 絵が絵を呼ぶ

国吉の絵（デッサン）を手に入れるまでは、この画家のことは余り知らなかった。当時は自分の出身地である九州山口の画家の絵に興味があった。素直にざっくり言えば画家の絵よりも物語性、地域性にこだわりと興味がアリダボハゼのように何にでも食いついた。そういう時期にこの絵に出会いすぐに食いついた、が先約があると丁寧に断られかなり落胆もした。世の中本人が思うほどうまく行く事は少ない。それから二年程時が経ちその事も忘れていた時分にA画商の所にこの絵があると伝え聞き、喜び勇んで駆けつけながらも今回はA画商の言値で買うと臍を固めていた。この頃の私は蒐集の代金は後で何とでもなる、まずは手に入れる事と決めていた。何の根拠も裏づけもないうままに自負心だけがあるという、奇妙な情熱だけが一人歩きしていた。今振り返って見ると、この時期を挟んで約一〇年程の間に私にとって秀逸と思われる作品と数量が集まってきた様な気がする。不思議な時代である。話を戻してA画商に会うと私が来る以前に売却したとの事、売却先を聞く私の剣幕に違和感を感じたのかA画商は知らない解らないの一点張りで追いかけるような雲の様な話になってしまい落胆も大きくなった。美神というのはいないようである。それからも蒐集と画債は拡大を図り、さしものダボハゼも制約が多くなった頃、あの絵が再び登場したのである。三度目の正直で、この絵との出逢いに不思議な因縁がある気がしている。熱い情熱ではなく、冷たい情熱の中、今この絵は苦しさと共に私の手元に在る。後日我が家に来訪したF美術館のN学芸員にこの話をした所、N学芸員が「絵は誰でも購入出来ますが、此処にある絵は絵が絵を呼び集めているのではないでしようか」と私に言った。美神はいるのかもしれない。山瀬一洋（福岡県糟屋郡）

国吉康雄 《裸婦》

コンテ・紙 62.2 × 47.8cm 制作年不詳



国吉康雄（くによし・やすお／1889-1953年）  
岡山市生れの洋画家。渡米。ロサンゼルス美術学校、1916年NYのアート・スチューデントズ・リーグに学ぶ。29年ニューヨーク近代美術館の19人の現代アメリカ作家に選抜。48年ホイットニー美術館で回顧展。53年没。63歳。

# 高島野十郎 《壺とリンゴ》

## ラスプーチンの絵

その日もいつものように行きつけの美術商の店に入った。店主の性格か店の中は雑多な品物で足の踏み場もない。普通の人にはもう商売を捨てた店先に見えるだろう。雑然としたこの店にごくまれに訪れる客に対して店主は自分の気が進まない人は店に入れないし黙って入った客は追い出すといったあんなばいばいで、ただただ女房の稼ぐ金で食っている様に見えた。店主の人相風体は一言で言えばロシアの怪僧ラスプーチンに似ていた。長い顎鬚と頭髪が怪しい雰囲気醸し出していた。話す内容も変わっていて、例えば田舎の倉庫代わりに使っている士民家に夜居る時等、二階から誰かが下りてくる足音がするが、どこを探しても誰も居ないのだと言い、笑っていた。ある時など一五号位の油絵をお前これを買えと差し出した。何程の代価でもない為不思議に思い訳を聞くと、良い絵は体で感じる事が出来る、この絵がそうだといい、長講釈の末仕方なく持ち帰った。翌日改めて絵を見た時店主の言った意味が解った。芸術とかではない。冷や汗が流れ体が何かを感じて気持ちが悪いのだ、確かに感じた。バタバタと月日が過ぎその年の暮れも押し詰まった頃に店を訪ねると店主が一枚の絵を出して金がある、お前これを買えと言い金額を提示した。丁度年末の支払いの為持っていた金額を逆に告げると、それで良いと言い、お前に売るつもりはないが、預けると渡された絵が高島野十郎で当時この画家を知る人は少なかったように思う。それ以来訪問の足は遠のいていたが、しばらくして噂話に店主が居なくなったと聞き店を訪ねて家人に聞いたが、気にしない風で解らないと言う。このボヘミアンの影響を強く自分自身で受けたと感じた事が度々有る。野十郎の絵を見る度に、きつと今頃は日本を出てどこかの大陸で飄々とあの調子で生きている店主が重なって見えてくる。怪僧ラスプーチンよ永遠なれ。 山瀬一洋（福岡県糟屋郡）

高島野十郎 《壺とリンゴ》

油彩・キャンバス 46.3 × 60.5cm 制作年不詳



高島野十郎(たかしまやじゅうろう/1890-1975年)  
福岡県生れ。大正・昭和の洋画家。東京帝国大学水産学科卒。独学で絵を学ぶ。透徹した精神性でひたすら写実を追求し、孤高の人生を送った。1928年黒牛会展に出品。50年示現会展に出品。59年丸善で個展。75年没。85歳。

# ■ 林 倭衛 《静浦風景》

## 清々しい青の詩情

林倭衛は大胆な筆触と色彩で、詩的情感の溢れる絵を描いた純粋な心を持つ画家であった。この作品《静浦風景》は静岡県静岡町の港町、静浦を描いたものである。制作年代は、一九三一年頃と思われる。当時はこのような文字どおり静かな海岸だったのだろう。穏やかに広がる海の青が眼にしみる。松の木の枝葉は海風に震えている。詩情を感じさせる爽快な絵である。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

林 倭衛 《静浦風景》

油彩・板 24.3 × 33.4cm 1931年頃



林 倭衛（はやし・しづえ／1895-1945年）  
長野県生れ。日本水彩画研究所に学ぶ。1917年二科展で樗牛賞。18年二科賞。20年二科会会友。21～26年渡欧。26年春陽会会員。30年有島生馬の知遇を得る。36年国画会に出品。37年新文展審査員。埼玉県で没。49歳。



## 野口謙蔵 《暮れる》

### 郷土への愛を気高く謳う

野口謙蔵は東京美術学校を卒業すると、琵琶湖の東に位置する郷里の滋賀県桜川村の蒲生野がもんのに帰り、終世その地で制作を続けた画家である。野口謙蔵の画業は、蒲生野の四季折々の移ろいや、明け方から夕暮れ、宵闇に至るまで刻々と変化する表情を感じ、心そのままに表現することであった。それは、単なる写真ではなく、郷里の風景・風土・人々への愛、眼差しの温かさでもあった。野口謙蔵は自由律の短歌を詠んだこともあり、絵には格調高い清らかな詩情が流れている。

この《暮れる》は、ほぼ暗闇に近い田園風景である。空の暗い雨雲は、天氣の急変を思わせる僅かの赤みを帯びている。よく見ると、画面の中ほどに、田圃の中の道を小走りて歩いていく傘をさした女性の姿がある。激しい雷雨となってきたのであろうか。稲の葉、遠くの集落・木立、うねるような山などは所々光で青白く照らし出されている。

絵具の色もよく分からないような暗がりの中、素早く激しい筆使いで自分の心を描くことに集中したのであろう。この絵には、郷土愛を貫いた野口謙蔵の高らかな思いがある。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

野口謙蔵 《暮れる》

油彩・キャンバス 32.0 × 40.7cm 制作年不詳



野口謙蔵（のぐち・けんぞう／1901-1944年）  
滋賀県生れ。1924年東京美術学校西洋画科卒。  
黒田清輝、和田英作に師事。郷里に戻り、蒲生野の風物を描いた。平福百穂の指導を受ける。31、33、34年帝展で特選。34年東光会会員。43年新文展審査員。滋賀県で没。43歳。

## ■ 長谷川湊二郎 《正倉院附近》

「この世のものとは思われない」 現実を描く

長谷川湊二郎を初めて知ったのは、二〇年ほど前、新聞のカラー版に掲載されていた《猫》の絵を見た時である。その絵は、じっと見ていると心が和み、自然と笑みがこぼれてくるようであった。それほど人の気持を心から幸せにさせてくれる絵との出会いは初めてであり、衝撃的なことでもあった。

非常に寡作であり、作品が出てくることは稀であるが、以来、機会があれば手に入れるようにしてきた。中には全くの偶然により、思いがけず入手できた作品もある。絵との出会いは、不思議なものである。長谷川湊二郎の絵を評価し、世に出した洲之内徹と長谷川湊二郎の出会いも全くの偶然であった。

長谷川湊二郎の絵は、控え目で地味であり、気がつかなければ通り過ぎてしまうような絵である。しかし、一度絵の前に立ち止まると不思議な世界に引き込まれてしまう。それは長谷川湊二郎のいう「目前にある現実が、（この世のものとは思われない）ような美に輝いている事実」を表現しているからであろう。

この《正倉院附近》は、手前の池から道、草むら、木立への斜面へと続く奥行き、木の葉の重なり、表情、木の幹と幹との空間などが実に緻密に描かれている。そこには、時が止まっているような永遠の静寂があり、心にずっと残る余韻と安らぎがある。そして、小さな画面に長谷川湊二郎ならではの不思議で大きな世界がある。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

長谷川湊二郎 《正倉院附近》  
油彩・キャンバス 19.0 × 24.5cm 1937年



長谷川湊二郎（はせがわ・りんじろう／1904-1988年）  
北海道生れ。川端画学校に学ぶ。1931～32年渡仏。32年二科展入選。43年一水会展入選。34、37、39年日動画廊で個展。フォルム画廊、現代画廊等で個展を開催。平明・静謐な画風で知られる。孤高な画家。東京で没。84歳。

## ■ 中西利雄 《ジャルダン・テュルリー》

### 滞欧名作が「六枚一組」の中に！

この絵は、さるオークションの六枚一組の中にあつたもの。下見会でも二〇〇二五号の絵が六枚重なっていると多くの人は敬遠して通り過ぎる（ひっくり返すだけでも重すぎて大変）。その上、この絵の上には間違つて別な画家の名前が貼つてあり、そして別な画家の絵の上には、ご丁寧にも「中西隆雄」と貼つてあつた。更に幸運なことには、オークション本番当日は雨。参加者が少なく、小生、運良く、なかなか入手出来ないミュージアムピース級をゲット！

この作品は、一九三二年日本水彩画会特別陳列出品作。権威ある美術関係者の言葉「本人（中西）の自信作だからこそ、この絵の前に立つて写真に写っているんですよ」

良い時には良い事が重なるもので、この絵は殆ど展示されたことがなかったせいかシミや褪せも殆どなく、描かれてから八〇年以上も経っているのに只今描いたようなみずみずしさが漂っている非常に良い保存状態！

教訓……「何枚一組」は「宝の山！」

松尾陽作（千葉県我孫子市）

中西利雄 《ジャルダン・テュルリー》  
水彩、ガッシュ・紙 56.5 × 75.5cm 1930年



1932（昭和7）年5月、フランスから帰国後、中西の滞欧作が多数特別陳列された、第19回日本水彩画会展の会場。

中西利雄（なかにし・としお／1900-1948年）  
東京生れ。光風会賞。東京美術学校西洋画科卒。日本水彩展、光風会展、帝展などに出品。1928～31年渡仏。サロン・ドートンヌに入選。帝展で特選。新制作派協会を小磯良平らと結成。日本水彩画会展に出品。48年没。47歳。



## ■ 藤田嗣治 《兎》

### 古書店で三枚いくらの水彩画↓全部本物のフジタ！

この絵は神保町の古書店で、三枚いくらで買ったものの中の一枚。店頭で一目見ただけで迷わず「本物だ！」と確信。取り敢えずポケットの中にあつた一万五千円でも手付けを打ち、急いで近所の銀行ATMに走って、引き取ったもの。購入の際も、その古書店主から、「真贋は保証しませんからね！」と念を押される始末。その後、目利きといわれる人々から「どうせ偽物に決まっている」とか「いかにもフジタらしく良く作ってあるね」とかの声、多数。

さる画商氏から「松尾さんがいくら声高に本物と主張しても、フジタと利行だけは鑑定を取らないと通用しません」とのアドバイスあり。

フジタは鑑定料が他の画家のものより格別に高いので（当時は一点一〇万円で現在は多少下げて八万円とのこと）気が進まなかったが結局鑑定に出した。後日「全部本物です！」との回答。

フジタといえ、定番は《裸婦》と《猫》。一方この絵は《兎》。大変珍しい。この絵はさらに描いているが、よく見ると兎の目が鋭く（鋭すぎ！）なかなかのもの。制作年月日もしっかりと書き込まれており、小品ながら佳品と思われる。

松尾陽作（千葉県我孫子市）

藤田嗣治 《兎》

水彩・紙 19.0 × 17.8cm 1938年



藤田嗣治（ふじた・つぐはる／1886-1968年）  
東京生れ。東京美術学校西洋画科卒。白馬会に入選。1913年渡仏。モディリアニ、スーチンらと交友。33年サロン・ドートンヌ会員。二科会会員。戦争記録画を制作。帝国芸術院会員。55年仏国籍を得る。フランスで没。81歳。

# ■ 広本季與丸 《青い服》

## 紀元二千六百年記念絵画展で特選候補になった絵

チャイナドレスの女性といえばスリットの深く入った深窓の麗人の立ち姿を思い浮かべますが、この作品のような市井の女性の美しさも引き出してくれる素晴らしい衣装であることが解ります。束の間の休息時に何を思っているのでしょうか。絵を見る私にも、安らぎのひとつを思うことの大切さを気づかせてくれます。作者・広本季與丸の絵画作品についての言葉があります。

永遠なる生命観を

これが私の信条です  
空を描けば 風を感じ  
水を描けば 汲み取れる水を  
人を描けば 肉体に暖かさを  
仏を描けば 幾年を経た良さとこうごうしさを  
石を描けば 其の重量感を  
花ならば 其のみずみずしさと香りを  
子供を描けば その歌声も  
画道は熟練は元より  
詩あり文学をともなつてこそ  
永遠の生命があり  
人々の心に応えるもののある作品を願う

野原宏（埼玉県久喜市）

広本季與丸 《青い服》  
油彩・キャンパス 117.0 × 91.0cm 1940年



広本季與丸（ひろもと・きよまる／1908-1975年）  
愛知県生れ。関西美術院で学ぶ。太平洋美術  
学校卒。1934年帝展に初入選。太平洋展で  
相馬賞。創元会運営委員。65年日展無鑑査。  
73年渡仏。温厚な人物画、静物画に特徴があ  
る。75年没。67歳。

## ■ 矢崎千代二 《アラビア丸にて》

これから物語が始まる！ 船出です！

この和服姿の少女は誰で、アラビア丸の船上でなにをしているのでしょうか。矢崎千代二は、パステルの名手でよく海外取材旅行をしました。当時も昭和五年から九年にかけて南米各地、中国、ジャワで取材旅行をしており、当地の風景画や女性像が残っています。

この少女像は、当時六〇歳になっていた作家の願いに応じ、少女がアラビア丸の船上でモデルとなったと想像しています。何故、和服なのでしょう？ 絹製の和服のようです。多分、少女は作家の願いか自らの考えで、旅姿から和服に着替えてモデルとなったのではないかと思います。

矢崎は白馬会に所属し、外光派の影響を受けた作家でした。船旅の船上での一時を好きな絵を描いて過ごした作家の気持ち豊かにゆったりと溢れ出ている作家の代表作だと思えます。時は秋、心地良い海風に身を任せモデルになっている少女の美しい黒髪、美しい絹ざわりの感触を持つ和服に感激して求めた作品です。

アラビア丸は大正七年、長崎の三菱造船で建造された大阪商船の半客半貨物船、一万トンです。この作品が描かれた昭和七年は満州国が建国された年、ドイツ総選挙でナチス党が圧勝した年です。

アラビア丸のその後の消息です。昭和一九年にマニラで米軍の魚雷攻撃を受け沈没。日本人市民を含めた約四〇〇〇名がマニラ退避のため乗船したところを狙われ、内三五〇〇名が犠牲になりました。合掌

堀良慶（千葉県柏市）

矢崎千代二 《アラビア丸にて》  
パステル・紙 60.6 × 45.5cm 1932年



矢崎千代二（やざきちよじ／1872-1947年）  
横須賀生れ。曾山幸彦、堀江正章、黒田清輝に学ぶ。  
1900年東京美術学校西洋画科卒。03～09年渡米欧。16～26年米欧、インド、南洋諸島を歴訪。  
30～34年南米、中国、ジャワに取材。38年満州各地歴訪、41年北京に移住。北京で没。75歳。



## ■ 井上長三郎 《浜辺》

空にぽっかり浮かんだ白い雲！

この作品は後世に残したい！と思うのはコレクターの究極の思いであるかも知れません。その一点、井上長三郎の滞欧作の《浜辺》をご紹介します。

私はその作家が創造したスタイルも好きですが、そのスタイルに至る過程の作品にも興味があります。どうしても若い頃描かれた作品群となります。この作品は滞欧作、三〇歳頃の作品だと思います。

風景画は好きで多く所蔵していますが、その中でもこの作品が一押しであります。私の絵に求める目的は心の癒やしにあります。この《浜辺》は常時、展示している作品です。

さて絵を見てみましょう。空にぽっかり浮かんだ白い雲がなんともいえぬ心地よさを出しています。浜辺の色は温かい薄い黄土色でその浜辺の輪郭線は人の体、優しい女体を感じさせます。海の深緑、木々の緑、空の空色は退色、白い雲と波打ち際の白が膨張色で遠近が図られています。季節は浜にさいている緑の草花から春と見立ててみましょう。

目に優しく、耳に打ち寄せる静かな波の音、肌に心地良い風、浜辺の様々な懐かしい匂い、足元の温かい砂と、舞台は揃っています。好きな方に優しく抱かれた気持ちで、さあ、昼寝を致しましょう。

堀良慶（千葉県柏市）

井上長三郎 《浜辺》

油彩・キャンバス 45.5 × 60.6cm 1932 ~ 40年頃



井上長三郎 (いのうえ・ちやうざぶろう / 1906-1995年)  
神戸市生れ。太平洋画会研究所に学ぶ。鬚光、鶴岡政男と交友。1927年「1930年協会展」で奨励賞。31年独立賞。35年独立美術協会会員。38年渡仏。39年美術文化協会会員。43年新人画会を結成。47年自由美術家協会会員。95年没。89歳。

## ■ 伊庭伝次郎 《女学生》

今度は君を離さない！

私は兄弟四人が男、小中学校、高校と女性との接触が少ないこともあって、又女性にはもてた例のないことも確かです。女性は苦手でも恥ずかしくて女性との接触を避けてきました。でも高校三年生の春休み、小中学で同級生だった女学生とばったり街で出会い挨拶を交わしたことがあります。この絵はその女学生に良く似ています。

その女学生は地元の石油会社に就職が決まっていました。しばらくして彼女の誕生日があり、お祝いに家に呼ばれたことがありました。その後、幾度かデートしましたが、お互いの環境が違っていつの間にか疎遠になっておりました。ほのかな甘酸っぱい、少し苦い青春の思い出です。

過去のこの事実はその通りですが、今の自分がその事を見直して、それに新しい解釈を加え、価値を与える事は自由です。ポジティブに考えを巡らすことも絵の効果の一つだと思います。

「女学生」さん！ 今度は君を離しません！（笑い、冗談です）私は彼女との別れを美しい思い出にしたかったのでしょうか。四苦八苦の一つ、愛別離苦（愛する人との別離の苦）に気付くために買ったのでしょうか。

さて関東では関西の作家の作品がただ同然で落ちている時があります。この作品も幸運にも競合者が存在せず。安価でゲット出来、小躍りしたものです。

堀良慶（千葉県柏市）

伊庭伝次郎 《女学生》

油彩・キャンパス 88.0 × 49.0cm 1942年



伊庭伝次郎（いば・でんじろう／1901-1967年）  
滋賀県生れ。関西美術院、太平洋画会研究所に学ぶ。二科展に出品、二科三十周年記念賞。1943年二科会員。後に理事に就任。成安女子短期大学教授、京都市立美術大学教授を歴任。京都で没。65歳。

## ■ 仲田菊代 《白い壺のバラ》

甘さを超えた美神との出会い！

私にとっての名品との出会いは何時も突然です。目の前に仲田好江の菊代時代（戦前描かれた）の《帽子の女》が現れ、即時に言い値（相場の倍）で求めました。次に出てきたのがこの《白い壺のバラ》です。

「甘い売り絵には手を出さない！」が当時、生意気盛りのコレクターのモットーでした。一瞬、甘い売り絵だ！と思っていましたが、口から出た言葉はその逆の「買います」でした。甘さを超えた美神宿る作品に思えたのです。私は仲田の戦前、戦後を通じても素晴らしい二作品を得たと思っています。コレクションの目標は作家の代表作のゲットにあります。

さて、この作品購入に私を突き動かしたものは一体何だろうか？ 一瞬、美しい画に目を奪われ、ほのかに匂いたつバラ、花卉の柔肌、華やかさと静寂さ。五感に訴えてくる典雅、香氣、清純、上品を感じる原因は何なのだろうか？ 彩度、明度、色相の三効果を中心に色彩の対比効果、色の持つイメージが見事に生かされた技術の粋を駆使した絵だと思っています。

手元にある五点の作品いずれも薰り高い、鮮麗優美、清らかな詩情を湛えた作品群。画格の高さが甘さを抑えて余りあります。菊代時代の作品は私の恋人たち。この作品にも師安井曾太郎の影響を感じますが、実に上品で女性らしい菊代ワールドの甘い薰りを存分に見せてくれます。

堀良慶（千葉県柏市）

仲田菊代 《白い壺のバラ》  
油彩・キャンパス 60.6 × 50.0cm 1942年



仲田菊代（好江）（なかだきくよ（よしえ）／1902-1995年）  
大阪生れ。小出楯重、安井曾太郎に師事。一水会会員。一水会で岡田賞を受賞。女流画家協会創立会員。1951年菊代から好江に改名。戦後、独特で幻想的な画風を確立する。女流画家の草分けとして活躍した。95年没。93歳。